



# 大リーグの赤字チームを立て直した 元ルーキーの痛快ドキュメンタリー

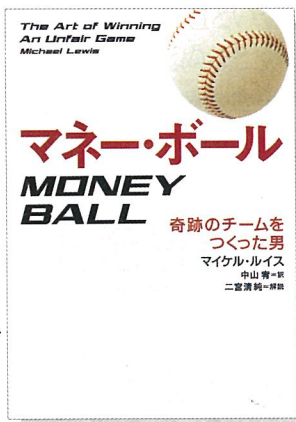
『ライアーズ・ポーカー』の作家マイケル・ルイスが今度は大リーグのドキュメンタリーを書いた。大リーグで勝つためにはどうい

選手を集めればよいのか、そのためにはどのような統計に注目すればよいのか、究極的には資金力のないチームをどのように立て直せばニューヨーク・ヤンキースのようなカネ持ちチームに伍していけるのか、といった問題が扱われている。本書の主旨は、これらの問題に答えを与えたといわれているオークランド・アスレチックスのゼネラルマネジャー（GM）のビル・ビーンである。ビーンは高卒ルーキーとして大リーグで成功すること間違いなしとしてドラフト指名されながら、ほとんど活躍することなく八年後にはスカウトとして野球界の裏方に転じた人である。彼自身の経験からスカウトが目をつける有力選手が必ずしも成功しないこと、そして野球の

常識とされてきたことにはそれほど根拠がないということを実感していた。

## 勝つためのデータを重視

ビーンはビル・ジェイムズというアマチュア野球アナリストが独自に導き出し



ランダムハウス講談社  
1600円

た勝利の法則を参考に、ハーバード大学卒の変わり種スカウト、ポール・デポデスタが集めたデータを基に選手を集めていく。その基準は、得点を挙げるためには出塁率プラス長打率が重要であり、打率と盗塁は重要ではない、犠打や守備上のエラーはそれほど問題にはならないというものである。結果は二〇〇〇年から

四年連続のプレーオフ進出に結び付いている。

## ビ

ーンの実績は見事であり、判官鼻<sup>びいき</sup>には痛快ではあるが、もう一つの現実も見失ってはならない。それはビーンの努力にもかかわらず、アスレチックスの経営は依然として赤字だということである。

日本ではアスレチックスに最も近い経営をしていると思われるオリックスが近鉄と合併するという話が急浮上しているが、野球界の構造問題はGMの努力や有能なオーナーの才覚のみではいかんともしがたいほど根深いものであり、より長期的、大局的な観点から、この合併問題を扱うことが大切であると思われる。

評者

北村行伸

一橋大学経済研究所教授